

関節の MRI

福田国彦, 杉本英治, 上谷雅孝, 江原 茂 ● 編集

〔評者〕菊地臣一 (福島県立医科大学附属病院長・整形外科教授)

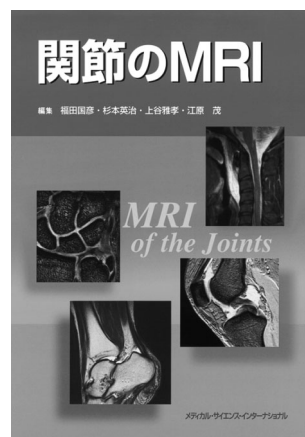
この本を一読して、運動器の領域である関節の画像検査も MRI の出現によって、「ついにここまできたのか!」というのが私の想いです。一時代前の関節や脊髄造影で確定診断をしていた時代は、ある意味、これらの手技は名人芸でした。事実、脊椎・脊髄外科領域で頭頸移行部や脊髄内の病変描出は、当時は真に名人芸のレベルでした。造影検査が患者さんに与える苦痛も、決して少ないものではありませんでした。

診療現場への MRI の導入は、最近における医療技術革新の最たるものの 1 つではないでしょうか。私は医師として長い間生きてきて、診療現場にこれほどの革命をもたらした機器は今までにないと言えます。従来の整形外科領域の画像診断は、「影」をみていたと言ってよいと思います。すなわち、形態学的評価が主たる診断価値でした。これに対して、MRI はあらゆる部位や組織の描出を可能にしました。さらに、MRI は形態とともに組織それ自体の変化をも描出してくれます。患者さんにとっての侵襲もないか、あっても軽度で、しかも読み手側に以前と比べたら比較にならないほど大きな情報を

与えてくれます。例えば、骨軟部腫瘍の評価では、形態のみならず、組織性状の描出、関節外科では軟骨病変は勿論のこと、骨内病変や軟部組織の変化を読み取れます。

一方、MRI は画像の読み手側にも大きな変化を与えました。従来、画像診断というのは、各領域の専門家が経験に基づいて、あるいは診療の一連の流れのなかで評価していました。MRI 導入後の現在では、医療機器に対する工学的・生物学的な専門的知識を持った読影の専門家が、豊富な知識を駆使して画像診断をするという時代になりました。つまり、MRI の導入というのは、読み手側にも専門的な知識や know-how を要求しているのです。

このような画像診断の今という時代を考えると、長い間、運動器の各領域で診療にあたってきた整形外科専門医と MRI の導入以来その読影にあたってきた放射線科専門医の両者が、今後は連携を密にして診断精度をさらに上げていくことが求められているのだと思います。そういう視点からすると、この本は待望の一冊と言えます。しかも、本書の執筆者は、第一線で運動器の MRI での評価に携



わっている人達です。

次に、われわれが画像診断で目指すのは、機能と形態との関係です。残念ながら、MRI であらゆる組織が描出されても、その組織が痛みを起しているかどうかはわかりません。MRI 診断の次の課題は機能評価です。

本書は、若い人には高価ですが、でもそれだけの価値はあります。

B5/頁 568/図 52・
写真 1059/2007 年
定価 13,650 円
(本体 13,000 円+税 5%)
MEDSi 刊